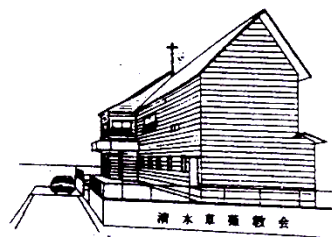


週報

2011年 1月 16日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル一会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈禱会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885
静岡市清水区草薙杉道3丁目2-26
☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp
振替口座 00890-6-214042

『満蒙開拓義勇軍』として

出征し帰れなかった弟

後藤 忍

戦後六十年経った現在でも、戦争の傷跡として私の心の底から未だに消え去ることの出来ないことは、二人の弟のことである。

すぐ下の弟は、終戦後二年経ったある日、栄養失調で衰弱しきった身体で『ひよっこり』と復員してきた。

しかし、回復することなく、この世を去った。
私は、この弟が我が家の畳の上で、この世を去ったことは一つの慰めであり、幸せであると思つた(戦病死扱いにならなかつたが…)。

しかし、未だにどうしても諦めきれないのは一番末の弟のことである。

末弟は、昭和十五年尋常高等小学校を卒業してから、たった四日間家にいただけで『満蒙開拓義勇軍』に応募して出征したが、戦後六十年経過した現在でも末弟の消息は不明である。

母は出征していくわが子に涙を見せまいといいながら、どれほど涙を流したことだろう。眼はいつも赤く腫れていた。

終戦後の父は、満州へ行ったわが子の消息や情報を得るために、数知れないほど県庁に通い、また、同時に入隊した義勇軍の家庭を県内外を問わず訪問して廻つたが、末弟の消息を確かめることは出来なかつた。

『死亡したという証拠はない』『どこかで生きていてほしい』と父は人目を忍んで氏神様(磐田郡御房村)に、十二年間も、毎日お参りし、手を合わせてお祈りしてきた。
しかし、昭和三十三年『早く事務処理を完了したい』という県庁からの依頼によつて、父は震える手で、末弟の戦病死届けに捺印した。

そして、昭和三十三年九月九日、末弟は声なく、姿もなく、白木の箱で還ってきた。

白木の箱の中には、ただ『後藤逸次』と名前だけ書いた紙が入っていた。

終戦から十三年が経過したこの日が我が家の終戦記念日である。

ああ戦争はいやだ！お互いに人が人を殺し合うだけだ！永遠の平和を祈る。



13年後、白木の箱が運ってきた。

満蒙開拓義勇軍として出征直前の逸次(右)と後藤逸次(左)